

2021 年度

講義科目名称： 国際社会学A

授業コード： 12048

英文科目名称： ---

開講期間	授業形態	単位数	科目必選区分
前期	講義	2単位	
曜日時限			
前期：月曜2限			
配当学科・学年			
人社2			
担当教員			
岡島 克樹			
添付ファイル			

授業テーマ	現在、世界と日本では何が起きているのか、世界と日本はどのように結びつき、分断しているのか、「多文化共生」「国際理解」「途上国」をキーワードにして、考える。
講義概要	1990年代以降「グローバル化」ということが日本でもさかんに言われるようになってきている。この「グローバル化」とは、下手をすると日本製品を世界で売するための英語力とプレゼンテーション力と同義であると勘違いされる「国際化」とは異なり、われわれのもっと根本的な価値観、他者とどう共生するかということにかかわるものである。本講では、そのような認識にもとづき、「多文化共生」「国際理解」「途上国」をキーワードにして、現在の世界と日本を考える。 なお、本講では、本講担当者や研究仲間が共同開発した多文化共生に関するワークブックや、開発教育協会（DEAR）が作成したアクティブラーニング教材（『あぶない野菜ビデオ』視聴とディスカッション、『スマホから考えるわたし・世界・SDGs』）を利用したワーク）を積極的に利用し、実感のともなう理解を獲得し、また、教職につくことを考えている学生にとっては、将来、教壇で教える立場に立った際につかえるコンテンツをつたえる授業を行う。
到達目標	(1) グローバル化のなか、その重要性を増す多文化共生についての関心とともに、専門知識のうち基本的な部分をもつことができる (2) その多文化共生を学習者に伝え、考える機会を提供する開発教育・国際理解教育についての関心とともに、専門知識のうち基本的な部分をもつことができる
評価方法	(1) 授業内テスト（70%） (2) レポート（2－3本）（30%）
フィードバックの方法	・レポートについては、ルーブリックをもちいて採点基準を明示し、自分のレポートのどこか強くてどこが弱いのかを学生が理解しやすい形にして返却する。 ・質問に対しては、授業内あるいは直後にその機会を設け、必要に応じて、本人のみ、あるいは、次の授業時に全体に向けて回答・説明する。
評価基準	(1) 多文化共生については、 <秀>多文化共生に関する現状や政策動向、さまざまな取組について述べることも、自分とどのように関係するののかについて、具体的な例をもちいながら、豊かに語る事ができる <可>多文化共生に関する現状や政策動向、さまざまな取組について述べることも、自分にひきつけて考え始めていることがうかがえる記述ができる (2) 開発教育・国際理解教育については、 <秀>開発教育・国際理解教育の歴史の変遷や実践方法上の特徴について述べることも、自分とどのように関係するののかについて、具体的な例をもちいながら、豊かに語る事ができる <可>開発教育・国際理解教育の歴史の変遷や実践方法上の特徴について述べることも、自分にひきつけて考え始めていることがうかがえる記述ができる
テキスト	村田晶子他（2019）『チャレンジ多文化体験・多文化共修ワークブック』ナカニシヤ出版（ISBN 978-4-7795-1359-6）
参考書	必要に応じて紹介する。
履修上の注意	(1) 「グローバル社会体験実習」等をつうじて、海外へスタディツアーに出かける学生にとって、本講は、スタディツアーの事前学習の一部をなすものである。そのため、そのような学生には本講の履修を勧める。 (2) 上述したように、本講では、アクティブラーニング・参加型学習手法を用いて授業を行う回が多数ある。自分がグループに対して有する責任を自覚し、真摯に取り組んでください。 (3) 本講では、学外から外部講師を招き、レクチャーを行っていただく回がある。その際、その外部講師の方のスケジュールによってシラバスに書かれた授業の内容が前後することがあるので、あらかじめ了解しておいてください。

準備学習<予習・復習の時間・内容>	<p>2単位の修得には、2時間×15回の授業のほかに合計60時間（4時間×15回）の事前事後の学習が必要である。30時間の事前学習（予習）と30時間の事後学習（復習）を目安に学習に取り組んでください。具体的には、以下のとおりである。</p> <p><予習> 上述のように、本講では、ワークブックを購入してもらい、教員の指示にしたがって事前に該当箇所を読んでおく、あるいは、自宅等でレポートを作成し提出・発表できるように準備する必要がある。ていねいに取り組んでくれることを期待している。</p> <p><復習> 毎回の授業後、自宅でワークブックを読み返したり、授業中にとったメモなどを読み返し、授業理解の深化をはかってください。</p>
オフィスアワー等	<p>月曜日1限目。</p> <p>授業後の時間を利用して質問等に対応する。また、毎回の授業終了に感想表への記入・提出をお願いするので、クラス全体にとって重要だと思われる質問が出た際には、次の回にこれを紹介し、受講者全員にフィードバックする。</p> <p>さらに、月曜日1限目をオフィスアワーとしているので、気軽に研究室を訪ねてくるようにしてください。</p>
備考・メッセージ	本講は、普段からの研究活動の成果に加え、日本政府の国際協力実施機関での勤務経験や、現在、理事等としてかかわるNGOが行う国際協力・多文化共生事業への関与、自治体審議会等の委員としての活動をつうじて得た知見を活かして実施するものである。
ディプロマポリシー	人社：DP2
科目ナンバリング	人社：HS-E-S22006-A34

授業計画						
回数	授業形態	担当教員	授業内容	到達目標		
1	講義	岡島	オリエンテーション	<p>本講の授業内容・目的・方法・評価方法等について理解できる。</p> <p>国際社会学とはどのような学問なのか、国際社会とはどのような空間であるのか、諸説を説明することができる。</p> <p>大学教育における異文化・多文化理解の意義とはどういうものかを説明することができる。</p>		
2	講義	岡島	外国人へのインタビュー（準備）	外国人（留学生・バイト先の同僚・空港利用客等）へのインタビュー課題で何を聞くか、どのような準備が必要なのかを理解することができる。		
3	講義	岡島	外国人へのインタビュー（結果発表）	日本にかかわる外国人にはどのような人がいるのか、関心をもち、その多様性について、基本的な知識をもつことができる。		
4	講義	岡島	ステレオタイプ・ヘイトスピーチ・マイクロアグレッション	講義とワークをつうじて、現在、日本その他の場所で起こっている異文化に対するネガティブな対応についてその重要性を認識するとともに、諸類型について基本的な知識をもつことができる。		
5	講義	岡島	ステレオタイプの事例理解（課題の発表）	テレビ番組から特定の地域への偏見や侮蔑を含んだ表現を見つけるワークに取り組んだ結果を共有することをつうじて、異文化への対応の多様性と課題について、より身近な問題として認識することができる。		
6	講義	岡島	国際結婚	国際結婚の動向に関する講義およびシミュレーションワークをつうじて、異文化との接触が身近なことであるばかりか、それとの共生がもためられるという現代社会の状況について理解をふかめることができる。		
7	講義	岡島	多文化共生の政策動向に関する講義	2000年代以降および最近の日本の多文化共生政策の動向について、その概略について基本的な知識をえることができる。		
8	講義	岡島	多文化共生に関する取組（外部講師）	外部講師による講義の聴講をつうじて、実際にどのような取組がなされているのかを踏まえて、多文化共生政策について、より深い関心をもつとともに、より詳細な知識をえることができる。		
9	講義	岡島	観光促進施設の紹介・地域の観光リソース解説（学外授業・外部講師）	日本の観光政策およびそのインパクト、実際の取組について、講義の聴講をつうじて、基本的な知識を獲得することができる。		
10	講義	岡島	作業日	グループにわかれて、学内において、富田林地域の観光ルートを企画する。		
11	講義	岡島	観光ルート提案発表会	学内・自宅等で企画した観光ルートについて発表することをつうじて、自文化に関する理解を深めることができる。		

1 2	講義	岡島	開発教育・国際理解教育の歴史の変遷	1970年代以降、開発教育・国際理解教育がとげてきた歴史的な変遷（学ぶ範囲・担い手・学習指導要領上の位置づけ・方法）についての基礎的な知識を獲得することができる。		
1 3	講義	岡島	開発教育・国際理解教育教材体験（1）	スマホという身近なモノに関するワークを実際に体験することによって、開発教育・国際理解教育の手法を実感するとともに、グローバル経済の在り方に関する関心・理解を深めることができる。		
1 4	講義	岡島	開発教育・国際理解教育教材体験（2）	野菜という身近なモノに関するビデオを実際に視聴し、グループでディスカッションすることをつうじて、開発教育・国際理解教育の手法を実感するとともに、グローバル経済の在り方に関する関心・理解を深めることができる。		
1 5	講義	岡島	総括（授業内テストの実施と解説、学習到達目標の確認ならびに補足的説明）	本講全体をつうじた学習到達目標がどのくらい達成できているのかが理解できる。 今後、学びを深めるためにはどのようなアクションが必要か、系統だって考えることができる。		

授業方法

	学習方法	場所	教員数(補助者数)	教科書以外の教材など	時間(分)
	講義・演習	教室	1		90分×13
	講義・演習	学外	1		90分×2